

令和元年（平成 31 年）度 自己評価結果公表

社会福祉法人ふじみ野会
子どものその幼保連携型認定こども園

1. 本園の教育・保育目標

子どものその保育生活協同組合から 50 年余り積み重ねてきた保育実践をもとに、一人ひとりの子どもを大切に、自然のなかで友だちと感動を共有してあそび、子どもたちが人とつながり生きる力を育てることを念頭に保育実践を行う。

平成 27 年 4 月から幼稚園機能と保育園機能を併せ持つ幼保連携型認定こども園として一体的な教育・保育を行う。

【私たちの願い(教育保育理念)】

豊かな自然	自然の中でのびのびと子どもを育てます
あたたかな人間関係	おとなの愛情と仲間の中で子どもを育てます
本物の文化やあそび	豊かな文化やあそびの中で子どもを育てます
地域とともに	園と家庭・地域が一緒になって子どもを育てます

【私たちのめざす子ども像(教育保育目標)】

- ◎友だちと思いっきりあそび、自分の気持ちを素直に表現でき、人とつながって生きていく子ども
- ◎何にでも興味・関心を持ち、自分でやってみようとする子ども
- ◎失敗を恐れずに挑戦し、仲間とともに学び、その経験を生かす子ども
- ◎あそびの中でからだを動かす楽しさがわかる子ども
- ◎生活習慣を身につけ、健康な生活ができる子ども

2. 本年度、重点的に取り組む目標・計画

【重点目標】

- ・幼保連携の特色を生かした保育・教育内容の構築に努める。
乳児期はあたたかい人間関係の中で安心して過ごし、自我の芽生えを大切にする。
幼児期は、大人の愛情を受け、自然の中で仲間と交わりのびのび遊ぶ中で自己肯定感を育てる。
- ・幼児中心の子育て支援の取り組み(うさぎの広場)だけでなく、新たに乳児を中心とした子育て支援(赤ちゃんのつどい)残り組みを始め、地域の未就園児の保護者を支えていく。

3、評価項目の取り組み状況

評価項目	取組み状況
1、教育・保育内容について	乳児担当の職員はチームワーク良く子どもたちの日々の成長を丁寧にみていった。高月齢の子が2月生まれの子に気持ちを寄せていく姿と子ども同士の気持ちの交流に感動し、乳児期の友だちのかかわりやつながりの芽生えを実感した。 幼児期の子どもたちは、行事ごとの節目で成長していく姿が多く見られた。安心した園生活を送る中で、自分の気持ちを周りの大人やクラスの友だちに受け止めてもらい、自己肯定感を土台に意欲的に活動する姿を実感した。 さらに子どもたちの中にクラスや年齢を超えた交流がたくさん生まれ、年長組へのあこがれの気持ちや小さい子どもへの優しい気持ちが育ってきている。また行事を一緒に行い、年長組は大きな集団で幼保のクラス同士が競い合ったり、一緒に遊んだりしながら盛り上がった。やがて遊びの中で培った総合的な力を学びの力につなげていくことを意識しつつも、急がずじっくりと育てることをこころがけた。
2、教育・保育内容の保護者への周知	毎月、各クラスや各年度で作るカリキュラムで、子どもの姿やその月に取り組む全体的な保育内容を伝えている。さらに日々のクラスや子どもの活動の様子をクラス新聞で伝え、節目ごとのクラス会で直接話し合う機会を設けた。 いろいろな行事に向けての取り組みを詳細に伝えたので、保護者がわが子だけではなく、クラスの子どもたちを温かく見守り共感する気持ちが、行事後の感想文にしばしば綴られた。
3、給食と食育	多様な食物アレルギーに対応する中、ヒヤリとする場面を無くするためアレルギーカードを記入式に変えた。給食室側と保育側の双方が記入し互いにチェックすることで改善をすすめている。毎月給食委員会を開き保育現場との意見を交流し、メニューの改善も行った。 旬の食材の枝豆やトウモロコシなどの皮むきを体験させることで野菜への興味を育てるなど自園給食だからできる良さと実感している。年長組の3学期にはクラスごとに給食室見学を実施。給食を作る過程を知った子どもたちは驚き、大切な食育の機会となった。

4、教職員同士の協力・連携	幼保連携を進めるため今年度も幼児クラスは幼稚部・保育部の担任が合同で話し合う年度別会議をできるだけ週 1 回行うようにした。その中でそれぞれの子どもに配慮する場面や幼保一緒に保育する場面など、認定こども園ならではの特徴と留意すべき点を話し合い、互いの理解を深めていった。 若い職員にとって、年度別会議は、少人数で自分の悩みを出しやすくアドバイスをもらえる機会であり、楽しく学べたという声が多くあった。 夏休みなど幼稚部が長い休暇の時は、幼稚部預かり保育はもちろん保育部の職員の休暇保障に交替で入る。そこで乳児保育体験など新しい学びを経験したことは、子どもの発達の理解を進める大事な経験となっている。 職員数の多い認定こども園なので、保育現場だけでなく、給食室、事務所、バスなどの運行管理にかかわるさまざまな職員の意見が反映できるように、合同年度担当会議や、行事の事務局会議などを開くようにし、日ごろからのコミュニケーションをより一層大切にする必要性を感じている。
5、研修・研究の充実	園内研究部会を中心に計画した年 4 回の園内研修はもとより、外部研修にも積極的に出かけた。希望者を募った民間研究団体の研修では、若手ベテランにかかわらず職員が自分の興味や課題から講座を決め、学んだことを日々の保育に生かしている。また、中堅職員を中心としたキャリアアップ研修では、マネジメントや保護者支援などで各園の情報に触れ、新たな学びとなっている。 新人職員の新人研修の参加を促し、園内で研究保育を行い討議した。 食物アレルギーの子どもが増えている現実がある。園内研修でアレルギーの多様性を管理栄養士から学び、誤食誤飲を避けるためにどうするかなど話し合った。また、エピペンを使った実技講習も行った。
6、健康・安全・衛生管理への配慮	健康・衛生管理面では、2020 年 2 月半ばから急激に「新型コロナウイルス」の感染がクローズアップされ、うがいと手を洗う習慣の徹底を図った。家庭にも協力をよびかけ、それによりインフルエンザやノロウイルスなどの感染症はほとんど見られず、子どもたちの健康を維持することができた。しかし感染拡大につれて、手指消毒だけでなく、施設や備品、バスなどの消毒などに大量のアルコールが必要となり、マスクとともに手に入りにくい状況が生まれた。

	まだよくわからなかった「新型コロナウイルス」の感染拡大の中、子どもたちの日常をできるだけ普通に守ろうと職員で話し合いを重ねた。年度末の保護者行事が次々と中止となる中で、卒園のお祝い等節目の行事は、三密を避け新しい形式で行った。 幼稚部園舎は屋上の雨水が染み出し、外壁の汚れが目立ったので夏休み期間を利用して大規模修繕を行った。雨水で濡れてすべりやすかったベランダも防水シートを張り安全になった。
7、保護者・地域との連携と支援	地域子育て支援事業として「うさぎの広場」を10年近く取り組んできたが、幼児向けの取り組みが主体であったことを反省し、子育て世代には0、1歳児に特化した支援が必要と考え、令和元年度から新たに「赤ちゃんのつどい」を始めた。 子育てが初めてのお母さんたちの悩みを聞いて助言をしたり、赤ちゃんの接し方やあそびを体験してもらい取り組みである。「うさぎの広場」同様に園バスによる送迎を行い、いろいろな地域から来てもらえるようにした。回数を重ねるごとに親同士、あるいは親と職員が気軽に話し合える場になった。 子育て相談については、こういう時に限らず、時間を延長して個別に聞いたりしている。 令和元年4月から幼稚部の各地域班から運営委員を選出し、幼稚部保護者による運営委員会が始まった。これは、前身の保育生協が大事にしてきた保護者の活動・交流・保育や行事への積極的な参加を認定こども園が引き継ぎ、さらなる発展を目指す組織である。運動会・夏まつり・親子そのまつりなどの園行事へのサポート、初心者キャンプセミナー、お父さんと遊ぼうコマ大会等の運営委員会の主催で取り組み、幼稚部保育部を超えた保護者同士の交流も生まれた。 ホームページは園を広く知ってもらい地域の方とつながる大切なツールなので、新たにホームページ担当の職員を決め、更新もできるだけ行うようにした。「赤ちゃんのつどい」や「うさぎの広場」の情報、園の見学会などのお知らせも載せるように心がけた。 夏まつりは、保護者や職員の模擬店やあそびのコーナー、地域の太鼓の会や婦人会の皆さんの盆踊りなどで盛大に行った。在園児やその家族、卒園生や近隣の方々も集まり、大きなつながりになっている

4、今後取り組むべき課題

課 題	具体的な取り組み方法
幼保連携型認定こども園としての教育・保育の推進	乳児クラスが2階にあるため、乳児の日常の姿が伝わりにくい面がある。乳児の安定した生活を守りつつ、幼児クラスとの交流をいろいろな場面で広げていく。 また、幼児の年度別会議はほぼ週1回行っているが、乳児のクラス会議は不定期だったので、定期的に開けるように会議中の見守り体制を整え、日常の保育の振り返りを大切にしていく。
教職員の資質向上	子ども理解を進めるために、広い視野を持ち、さらに積極的に研修研究活動に取り組めるように外部研修や講師を招いての研修に取り組む。 園内研修の内容が固定化されつつあるので、視野を広げ充実を図る。
子育て支援の取り組みの充実	主幹保育教諭を中心に、専任のサポーターを配置し、「うさぎの広場」と「赤ちゃんのつどい」の内容をリフレッシュして、子育てを楽しめる雰囲気を作っていく。 保護者同士の交流、仲間づくりを目指し、地域に開かれた園として取り組む。
食育の推進	乳児クラスだけでなく幼児クラスの子どもたちの給食時間の様子を時々見に来てもらい、メニューや食材の話をしてもらい、食への興味関心を広げる。
保護者参加	幼稚部運営委員会主催の「お父さんと遊ぼう」行事に幅広く声掛けして保護者の参加を促し、新しい体験を積むことで父親の子育てへの参加を図る。

以上の通り報告します。

令和2年（2020年）3月31日
 子どものその幼保連携型認定こども園
 園長 石原 雅子